

舞踏ダンスデュオ「偶成天」の米国ニューイングランド公演

ーボストン・アムハースト 暗黒舞踏ツアーの不思議な縁ー

舞踏デュオ「偶成天」 舞踏家 森田一踏 竹内実花

暗黒舞踏とは、1950年代に土方巽が創始した日本発の前衛的舞踊である。全身に白塗りを施した舞踏手が暗黒の舞台上で踊り狂い、のたうち回り、立ち尽くし、魂の奥底に至るまでその姿態をさらけ出すという点において、通常のダンスの概念を遙かに超越したパフォーマンス・アーツとして知られている。現在では、国内よりも海外での評判が極めて高く、Butohは欧米の舞踊界・美術界に大きな影響を与えて今日に至っている。そうした中、1996年に札幌で旗揚げした「偶成天」は1999年以降、年間に1~2回の海外招待公演と1~2回の国内新作発表公演を中心に活動を続け、昨年は10周年の舞踏イベントを開くに至った。そうした中、GooSayTenのサイトには英語のメールが頻繁に届く。いわく、「Butohのレッスンを受けたい」「Butohについて学びたい」と様々な国(アメリカ、カナダ、メキシコ、コロンビア、ドイツ、ポーランド、イタリア、ギリシャ...)の様々な経歴の人たちが西区二十四軒にある竹内実花 BUTOH 研究所にやってくる。

今からちょうど三年前、「会いたい」というメールが届き、真冬の日本海の荒波をフェリーでやってきたアメリカ人女性がいた。高野山で修行し、両足が壊死寸前となりドクターストップがかかった...阿闍梨の資格がある...という人だった。宗教文化人類学の専門家でボストン大学文化宗教国際事情研究所(Institute on Culture, Religion and World Affairs)の研究者、クリスタルさん(Dr. Christal Whelan)だった。一面識もない人とメールの約束だけで海外公演に出かけてしまう一踏も実花も北海道生まれ北海道育ちであり、良くも悪くも人の厚情に弱い、熱い心にも弱い、クリスタルさんの凄まじい体験に感嘆し同情し、スーパカレーを食べながら夜遅くまで話し込んでいた。

そして、公演の前年、クリスタルさんからの紹介ということで、ボストン日本協会の望月典子ディレクターから舞踏公演の打診があった。同時に北海道マサチューセッツ協会を紹介され、事務局にお邪魔すると「偶成天の偶成とは中国の朱熹による漢詩の題名なのです」と事務局長の中垣正史さんから丁寧に教を請うことになった。「少年老い易く学成り難し」のあの漢詩である。「偶然の中で天は成る」という意味で舞踏デュオ「偶成天」を名乗っていたのだが、HOMASとの出会いそのものがまさに偶成であった。10年前の「偶成天」結成時からこうした不思議な縁が培われていたのだろうか...。「ニューイングランド・プレミアム・ツアー」は絶対に実現させなければと思った。

国際交流基金の資金援助もめでたく獲得でき、2006年11月初旬、シカゴでのセキュリティチェックの厳重さと乗り継ぎトラブルに見舞われながらも、とうとうボストンに降り立った。舞踏家二名、NPO法人「コンカーニーニョ」理事で照明・舞台監督の高橋正和氏、総勢三名の精鋭部隊である。海岸にきらめくガラス張りの超近代的「ボストン現代アート研究所ホール(ICA)」のこけら落とし公演となることを願っていたが、結局、建物が完成せず、ハーバードのゼロアロー・シアターでの公演準備に入る。ニューヨークでは舞踏公演も頻繁だがボストンでは少ないという真摯な観客の前で命がけで踊る「To the White: To the Sky」という作品は、天の神の怒りとシバラレの中に生きる北の人々の凄まじさを舞台に映し出したものだった。スタンディング・オベーションでの喝采だった。アメリカでは受けないかもしれないと思っていた静謐さの中での踊りと繊細な狂気が評価されたのが嬉しかった。

次の日、精鋭三名とボストン日本協会スタッフを載せた車は、一路、西へ、高速道路をアムハーストへとひた走る。両側の景色や建物の風情、牧舎のシルエット、その全てがそのまま「北海道」だった。まったく、クラーク博士は自分の郷土を北海道に再現しようとしたに違いない。マサチューセッツ大学のポーカー・オーデトリウムは、壇上でついさっきまで初代学長就任演説が行われていたかのような古式ゆかしい巨大なホールだった。100年以上の歴史が刻まれた楽屋からの狭い階段、その床板を全身白塗りの裸足で静かに踏みしめながら舞台へ登っていく...

二人の舞踏手が舞台上で崩れ落ち、無音となり、踊りは終わった。そこにスタンディング・オベーションでの絶賛の拍手が始まった。ため息が出るほどに美しい照明の下で踊って幸せだっただけではなく、大きくて暖かい拍手がいつまでも続く。アムハースト公演を支援してくれたインド舞踊の大学教授が泣きながら楽屋にやってきてみんなで抱き合った。偶成天は、南の島、本州などでの公演は少ない。できれば北の風の通っているところで踊りたいと願って10年間踊ってきたが、マサチューセッツ公演はまるで故郷での里帰り公演のように思えた。公演と移動、大学でのレクチャー2回、舞踏レッスン4回というハードな日程を続けてきた身体が一挙に緩んだ至福の時だった。

ボストンに戻りユニオン・オイスター・ハウスでささやかに打ち上げ牡蠣パーティとなる。チェリー・ストーン貝もいただく。雷が電気であることを証明したベンジャミン・フランクリンの墓地にふらりと迷い込む。ロブスターの赤い小さな



縫いぐるみをおみやげ用に買う。公演前後はいつも忙しく、観光らしいことがなかなかできないのだが、ありがたいことだ。

ボストン日本協会の尽力もあって、公演打ち上げの公式パーティとしてボストンの日本総領事館に招待される。東山魁夷の茫々とした緑の色づかいが玄関ホールを飾る中、日本通のマサチューセッツ人が三々五々語らい歩む。公演のことを手始めにボストンや日本や北海道の話に花が咲く。衣装の色とデザイ

ンに関心がある竹内実花はボストン美術館の浮世絵を見る暇がないのを残念がる。日本語と英語とたまにロシア語も入り乱れての文化談義が続く。北海道の開拓時代、サトボロの土地でも北海道人とマサチューセッツ人はこうして語り合っていたに違いない。歴史の深みと今回の舞踏イベントの不思議な縁に思いを馳せながら、ボストンの初冬の夜が深まっていった。

* 写真提供 (C) 高橋克己 2006

<ご紹介>

暗黒舞踏「偶成天」は、舞踏家の森田一踏（本名：葛西俊治）・竹内実花両氏によって1996年に結成された札幌の前衛的な舞踊集団です。

道内での継続的な公演及びワークショップ、さらに1998年からのアメリカ・カナダ・ドイツ・ポーランド・スペイン・ロシア・ウクライナなどの海外公演により、この10年間の活動実績は、世界的に高く評価されています。その前衛的な舞踏の芸術性とあわせて深層心理に働きかけるダンスセラピーの芸術療法が注目されています。

この度のマサチューセッツ州における舞踏公演・ワークショップ・講演を通しての「舞踏によるアートセラピー」の実践と理論的指導2006年11月7日～10日も、大成功を収めています。北海道とマサチューセッツ州の文化交流活動にも大きく貢献されました。